

説教 『偽らない子らとして』山本 護 牧師
聖書 イザヤ書 63：8～9／ヨハネによる福音書 15：8～9

J.P.サルトル(1905～80)は「あなたは、あなたの一生以外の何ものでもない(存在と無)」と言った。こんな渴いた金言に励まされることがある。情緒的な偶像を含んだ信仰より、潔い無神論の方が良い。「私は、私の一生以外の何ものでもない」と覚悟し、己が責任を負いたい。大仰な挫折や夢といった思い込みを退け、日々を誠実に、淡々と過ごす。自分自身の喧騒から離れて沈黙すると、茫漠とした中に何か奥行きめいたものが予感される。「私は、私の一生以外の何ものかと結びついている」。

預言者は、存在の最奥からの御心を語る。「彼らの苦難を常に御自分の苦難とし、御前に仕える御使いによって彼らを救い、愛と憐れみをもって彼らを贖い、昔から常に彼らを負い、彼らを担ってくださった(イザヤ 63:9)」。私が苦しい時、神はそれを御自分の苦しみとされる。それだけではない。私の喜びも御自分の喜びとされ、私の痛みや悲しみを神自らが負い、これら全てを担って下さるのだ。

「あなたは、あなたの一生以外の何ものでもない」。こんな私のささやかな数十年。世の片隅の小さな生涯が、宇宙を創造された神にとってかけがえのない出来事としてある。「昔から常に彼らを負い、彼らを担ってくださった(63:9)」神の真実。ちっぽけな私の、なんという驚くべき奥行であろうか。

イエスは弟子に語った。「あなたがたが豊かに実を結び、わたしの弟子となるなら、それによって、わたしの父は栄光をお受けになる(ヨハネ 15:8)」。逆方向から言えば、父なる神の栄光は、キリストにつながった私たちによって、世において明かになる。全宇宙の隅々を統べておられながら、神の何たるかは奥行に隠されたまま、己が生命を与えられながら何びともその真実に気づかない。ゆえにキリストに結ばれた者はそれを言い表す。かといって、神を喧伝して廻るわけではない。「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい(15:9)」。ただキリストの愛にとどまろうと祈り、静かに仕えるその事自体が「神が栄光をお受けになる(15:8)」備えとなる。

今もなお神は、「彼らの苦難を常に御自分の苦難とされる(イザヤ 63:9)」。これは神から人への方向。キリストの愛を介して神につながる私たちの苦難が、神の栄光となる(ヨハネ 15:8)。これは人から神への方向。神と人は、あたかも呼吸する(聖霊)ように相方向から結びついている。ゆえに、苦しみや悲しみは取り去られるものではない。私たちの偽らざる姿が神の栄光を形づくるのだから。愛にとどまり、「私の一生以外の何ものでもない」悲しみを抱えながら私たちは生き、死に、そして永遠を生きる。

「主は言われた。彼らはわたしの民、偽りのない子らである、と。そして主は彼らの救い主となられた(イザヤ 63:8)」。『偽りなく正統な子ら』ではなく、「偽らない子ら」。つまり、見せかけの敬虔さよりも、「偽りのない」罪深さが「神の子」としてふさわしい。私たちの内実がどうか、ではない。ただ「偽りのない子ら」であることが神に対する誠実さなのだ。自惚れや劣等感も、手柄話やトラウマも、すべてひっくるめて「偽りなく」神に担っていただく(63:9)。偽りなく、そのまま、キリストの愛にとどまり(ヨハネ 15:9)、永遠なる救い主によって(イザヤ 63:8)、私たちは豊かな実を結ぶだろう(ヨハネ 15:8)。



【おまけのひとこと】

思い描く理想像の何がいいのだろうか 他者が羨み 私が羨むからに過ぎない そんな偶像の何がいいのか 神が認め給う者こそを思い描きたい するとどうだろう 罪深くちっぽけな私と出会う